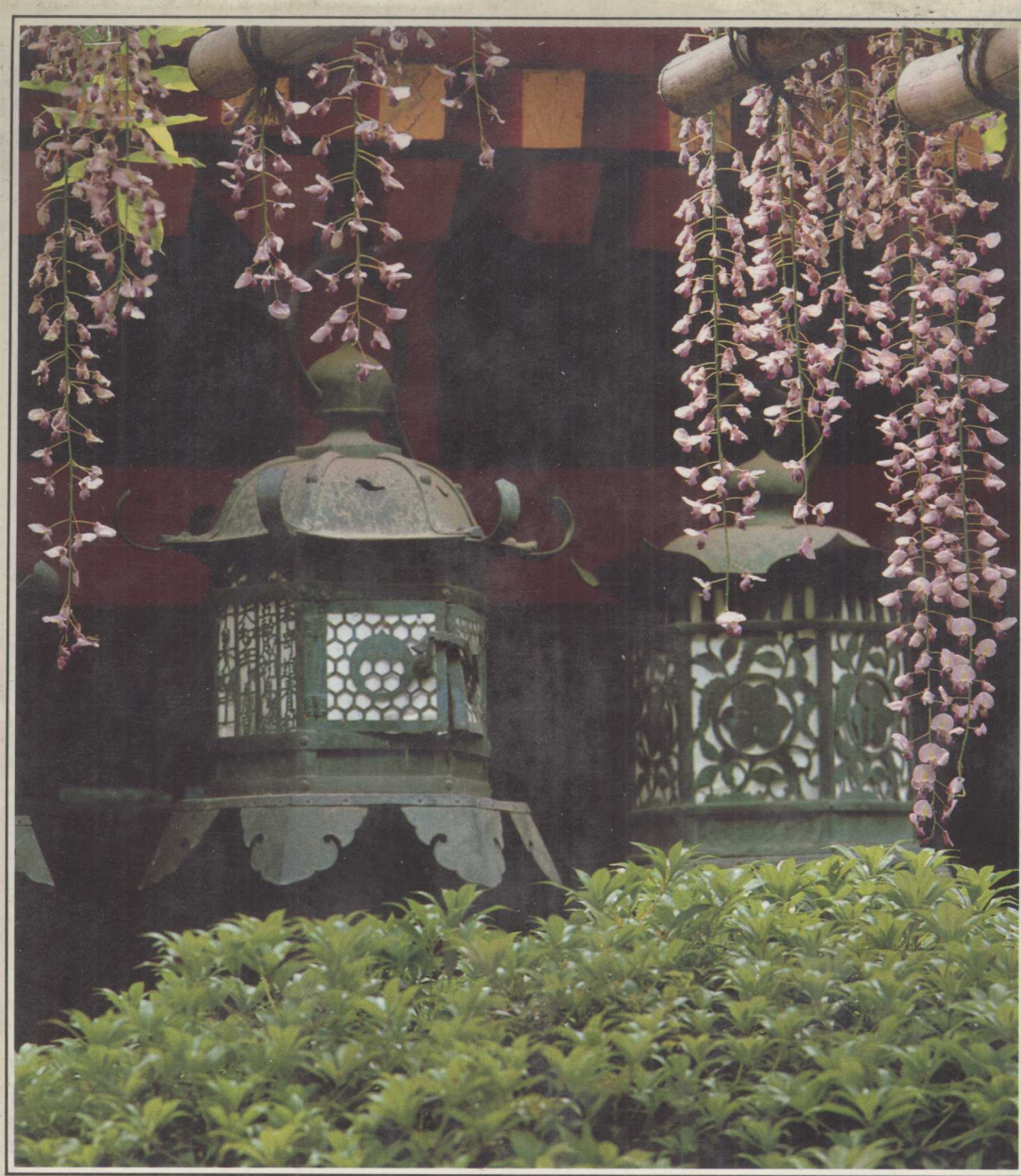


カラ版 自然の詩

花のやまと路

ふるさと歳時記



カラー版 自然の詩

花のやまと路

昭和五十八年四月十一日発行

発行人 石原明太郎

発行所 (株)国際情報社

発売 (有)光 書 房

〒150 東京都渋谷区東一―二八―六

電話〇三(四〇七)六一四六

振替東京 五―三六五四八

印刷 国光印刷(株)

定価 一六〇〇円

© KOKUSAI JOHO SHA 1983

カラー版 自然の詩

花のやまと路

ふるさと歳時記

国際情報社

花のやまと路 目次

北部に咲く

秋萩におう高圓野……………犬養 孝 6

サクラ〈奈良公園・奈良市〉	8	クチナシ〈慈光院・大和郡山市〉	36
ナラヤエザクラ〈東大寺・奈良市〉	10	ワイリヤブラン〈達磨寺・王寺町〉	37
ヤマブキ〈般若寺・奈良市〉	11	ヒオウギ〈柳生の里・奈良市〉	38
フジ〈春日大社・奈良市〉	12	キキョウ〈円成寺・奈良市〉	39
ツバキ〈新薬師寺・奈良市〉	13	ハルシヤギク〈元興寺・奈良市〉	40
ハクモクレン〈法輪寺・斑鳩町〉	14	ヒメジヨオン〈法輪寺・斑鳩町〉	41
レンギョウ〈不退寺・奈良市〉	15	オイランソウ〈都祁村〉	42
モモ〈斑鳩の里・斑鳩町〉	16	ムクゲ〈水上池・奈良市〉	43
ナノハナ〈斑鳩の里・斑鳩町〉	17	メハジキ〈柳生の里・奈良市〉	44
ハクチョウゲ〈慈光院・大和郡山市〉	18	ミソハギ〈大和郡山市〉	45
ボケ〈西方寺・奈良市〉	19	ハナトラノオ〈佐保路・奈良市〉	46
アセビ〈奈良公園ささやきの小径・奈良市〉	20	ハマユウ〈春日大社万葉植物園・奈良市〉	47
シダレヤナギ〈興福寺・奈良市〉	21	ハギ〈白毫寺・奈良市〉	50
カザグルマ〈法華寺・奈良市〉	22	ユウゼンギク〈喜光寺付近・奈良市〉	52
五色散リツバキ〈白毫寺・奈良市〉	23	ダリア〈平群町〉	53
シモクレンとレンギョウ〈白毫寺付近・奈良市〉	24	コスモス〈般若寺・奈良市〉	54
レンゲソウ〈斑鳩の里・斑鳩町〉	25	カキ〈東大寺付近・奈良市〉	55
アジサイ〈矢田寺・大和郡山市〉	28	シオン〈佐保路・奈良市〉	56
ハス〈大和郡山市〉	30	イチヨウの黄葉〈春日大社・奈良市〉	57
ザクロ〈東大寺・奈良市〉	31	ウド〈天理市〉	58
クサギ〈東大寺・奈良市〉	32	フヨウ〈薬師寺・奈良市〉	59
ガーベラ〈十輪院・奈良市〉	33	ススキ〈法起寺・斑鳩町〉	60
サルズベリ〈東大寺・奈良市〉	34	枯落葉〈飛火野・奈良市〉	61
ボダイジュ〈唐招提寺・奈良市〉	35		
春シジミバナ、ニワウメ、シロヤマブキ、タムシバ、ホオノキ、ニセアカシア	26		
夏クガイソウ、ヒメユリ、ガマズミ、アラゲハンゴンソウ、ムラサキカタバミ、イワタバコ	48		
秋 シラヤマギク、シユウメイギク、イタドリ	62		

南部に咲く

飛鳥の花への想い……………入江泰吉 64

ボタン〈長谷寺・桜井市〉	66	タチアオイ〈吉野町〉	88
フクジュソウ〈吉野町〉	68	シュンギク〈小原の里・明日香村〉	90
ヤマザクラ〈吉野山・吉野町〉	69	ヒヤクニチソウ〈明日香村〉	90
サンシユユ〈長谷寺・桜井市〉	70	ミズギボウシ〈飛鳥川畔・明日香村〉	91
ツツジ〈壺阪寺・高取町〉	71	モミジアオイ〈吉祥寺・五條市〉	92
ウメ〈石光寺・当麻町〉	72	ゼニアオイ〈川原寺跡・明日香村〉	93
ヤマツツジ〈大蔵寺・大宇陀町〉	73	ムシトリナデシコ〈室生村〉	94
シダレザクラ〈大野寺・室生村〉	74	セキチク〈奥香落溪・曾爾村〉	95
クサイチゴ〈山辺の道・桜井市〉	75	紅葉〈談山神社・桜井市〉	98
ジンチヨウゲ〈山辺の道・桜井市〉	76	サネカズラ〈山辺の道・桜井市〉	100
ユキヤナギ〈長谷寺・桜井市〉	77	ヒガンバナ〈仏隆寺・榛原町〉	101
ナシの花〈三輪山麓・桜井市〉	78	マンリョウウ〈石光寺・当麻町〉	102
ハナズオウ〈室生寺・室生村〉	79	ウメモドキ〈葛城の里・御所市〉	103
シヤガ〈壺阪寺・高取町〉	80	ムラサキシキブ〈橘寺・明日香村〉	104
ヤブデマリ〈大峰山・天川村〉	81	シロシキブ〈大野の里・室生村〉	105
落ツバキ〈巨勢寺塔跡・御所市〉	82	寒ボタン〈石光寺・当麻町〉	106
ヤグルマソウ〈明日香村〉	83	タマスダレ〈橘寺・明日香村〉	107
シヤクナゲ〈室生寺・室生村〉	86		
春 カラタチ、マンサク、タチツボスミレ、ウツギ、アヤメ、ウグイスカズラ	84		
夏 テイカカズラ、ヤブカンゾウ、ナンテンハギ、フタリシズカ、グンナイフウロ、ヘクソカズラ	96		
秋 フジバカマ、キクイモ、ナンバンギセル	108		

大和路花の文化史	109	西山松之助	109
大和路の風土と花	116	菅沼孝之	116
大和路の花と民俗	120	桜井 満	120
西の京、斑鳩の花	126	澤野久雄	126
心に残る万葉の花々	130	生方たつゑ	130
大和路の花名所めぐり	134	大貫 茂	134
カラー写真索引地図	142		

はじめに

●本書は大和路に咲く花を、それぞれ、「北部に咲く花」、「南部に咲く花」に分けて編成されています。

●北部は、河合町から都祁村南部を結ぶ線を境にして北側の奈良市周辺、斑鳩の里、月ヶ瀬村、柳生の里などを含む地域で、南部はその南側に当る明日香村、室生村、五条市、吉野山、大峰山周辺などを含む地域です。

●カラー写真は、北部・南部ともに春、夏、秋の季節に分け、季節ごとに咲く花が一目でわかるように構成されています。

●花の開花時期と季節分けは、一月～五月までをそれぞれ早春・陽春・晩春、六月～八月までをそれぞれ初夏・盛夏・晩夏、九月～十一月までを初秋・中秋・晩秋の季節に入れています。季節の区分けは撮影年月日を主体としていますが、冬の季節はなるべくさけ、早春・晩秋の中に組み入れるようにとめました。

●本書は大和路の特色を出すために、できるだけ大和路の風景を花の背景に取り入れるようにとつとめ、各季節ごとに、図鑑風に花を見せるページも設けてみました。

●すべて自然の中に息づく花を主体とし、自然の中にありのままに咲いている花の姿を強調してあります。

●どの花もみな美しく可憐であり、人々の心をなごませずにはおきませんが、本書は特にわかりやすい植物解説と味わいのある秀句を付して季節の美しい花々を謳いあげています。ふるさとの花ごよみとして、また、大和路を愛する人だけでなく、すべての花を愛する人々の心の友として、多くの方々に活用されることを願ってやみません。



カラー写真解説／大貫 茂

写真／フォトライブラリー・ひまわり 浅野喜市
ジェイ・オー サンエイ・フォトライブラリー
ネイチヤー・フォトライブラリー 矢野建彦
地図・カット／森 茂

北部に咲く

まほろばの大和。

その歴史を秘めた

舞台に立つて南都を

偲べば、たまゆらの幻

想の中に、万葉びとの心

を育んだ可憐な花々の息吹

が蘇^{よみがえ}る。寧^{なら}楽、佐保、斑鳩^{いかるが}

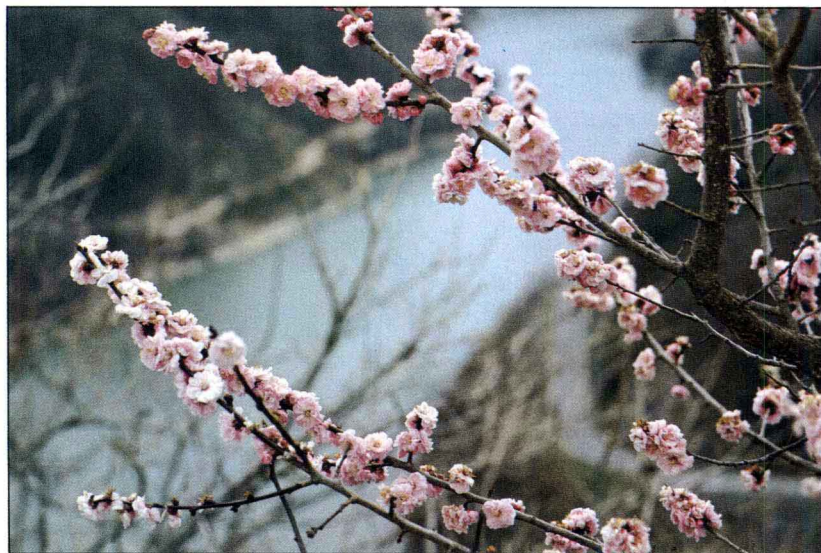
の小径や、生駒、竜田、

高圓^{たかま}の山路には、はる

か古^{いにしえ}の都を懐古させ

る美しい花々との

出会いがある。



ウメ＝月ヶ瀬村

秋萩におう高圓野

犬養 孝

白毫寺境内に充ちあふれる萩の静寂ほど、無言に時の流れを語るものはない。

行く人の影さす萩の垣根かな

蒼虬

風立つや萩はもとより花こぼす

楠本憲吉

萩の花一本をればみなうごく

梅室

奈良の新薬師寺から白毫寺へと南へゆく細道は、青年のころから何度歩いていても心たのしい道だ。白毫寺にのぼる傾斜から、御蓋山は、春日の主峰とは、くつきりと別の山になっていて、道に人影も少ないし、三笠山野辺ゆく道はこきだくも茂り荒れたるか久にあらなくに

(巻二―三三)

を、そのままの感で、天智天皇の皇子の志貴皇子の春日宮も、この辺のどこかにあったのだろうと思われる。秋九月のなかばごろから、十月なかばごろまでは、白毫寺の萩はまっ盛りで、石段の両側の紅萩も、境内の白・紅とりどりの萩も、袖触らばにほひぬべくも”と思われるほどで、ばらばらとこぼれ落ちそうである。わけて、人の去った夕景は、花々までよみがえるあざやかさだ。

春日宮の跡はどこともわからないが、寺はそのあとに建ったといわれて、毎年九月十五日には、志貴親王忌が行なわれている。境内の奥からは高圓山の全容もま近にのぞまれ、聖武天皇の高圓離宮も、この付近のどこかの野づかきであつたかと思われる。大伴家持は、

高圓の野の上の宮は荒れにけり
立たしし君の御代遠そけば

(巻二十一―四五〇六)

とうたつたが、聖武天皇亡きあとの時代の荒廃寂寞の趣きは、この周辺にただようかのようだ。それよりは



やく、平城京の初期、霊亀元年（七一五）には、志貴皇子が春日宮で亡くなった。その時の、田原の里への野辺送りを、劇的にうたいあげた笠鉾の挽歌は、高圓の野の荒涼のさきがけのようだ。その反歌の一つ、
高圓の野辺の秋萩いたづらに
咲きか散るらむ 見る人なしに

（巻一―三三）

は、葬送の終ったのちの日の、寂寥を奏でつづけている。私は一昨年、寺からたのまれてこの歌を揮毫し、境内の五色椿の後方、高圓を望むところに歌碑を建てていただいた。白萩が、みつちりと植えられ、碑の文字も覆われるほどである。高圓の東の真裏、田原の里に、志貴皇子の田原西陵のしずまることを思えば、まさに恰好の位置である。皇子の子孫から、平安初期の天智天皇の皇統につながってゆくことを思えば、白毫寺境内に充ちあふれる萩の静寂ほど、無言に時の流れを語るものはない。萩の色もいちだんと冴えて、『万葉のいのち』ここにいきづくの感を深めるのだ。萩の花は、山上憶良の秋の七草の歌にも、『萩の花尾花葛花などでしこの花をみなへしまたふじばかま朝顔の花』と筆頭にうたわれている。高圓の裾みの七草のかぞえられるころ、白毫寺の萩は、『わが世の秋』を、声も立てずに、高らかにうたいあげているのだ。

（大阪大学名誉教授・文博）

古都の春を彩る

桜咲く前より紅氣立ちこめて
ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな

山口誓子
村上鬼城

サクラ川奈良公園(奈良市)

サクラは国花だけあって日本の国土によく溶けこんでいる。城郭、公園、神社仏閣、川堤などに植えられて花の名所を作り、日本ならではのしっとりとした情景をかもし出す立て役者だ。

ひと口にサクラといってもこの仲間にはサトザクラ、ヤマザクラ、ヒガンザクラ、カンザクラ、フユザクラなどたくさん種類があるが、全国各地のサクラの名所の主役となっているのがソメイヨシノ。このサクラは平均的には五、六十年の寿命でヒガンザクラなどに比べるとぐっと短命だが、樹齢が三十、四十年の成木の花つきは抜群である。興福寺の五重塔を背景に咲き誇るサクラもこのソメイヨシノである。

花の盛りは四月五日〜八日頃。







いにしへは奈良酒で見ん八重桜
八重桜花のおもてに崩れなし

重頼
高橋梨丘

山吹の黄の鮮らしや一夜寝し

橋本多佳子

ナラヤエザクラⅡ東大寺(奈良市)

平安朝時代の才媛・伊勢大輔が「いにしへの奈良の都の八重桜けふこのへに匂いぬるかな」と詠んでいるほか『徒然草』や『沙石集』のなかにも登場していて都に住む人々に愛され、親しまれていたのがこのサクラ。

東大寺塔頭の知足院本堂の裏庭にはナラヤエザクラの成木がある。八重咲きで花びらがほんのりと赤味を帯びたこのサクラはサトザクラのどの品種にも属さない珍種で奈良県指定の天然記念物として厚い保護を受けている。

花の盛りは五月初め。

ヤマブキⅡ般若寺(奈良市)

ヤマブキはいかにも野の花といった趣の感じられる花である。緑色をした茎が風のまにまに揺れる姿はどこか弱々しいことから山振（ヤマブキ）と命名されたといい、春の野山を飾る花のうちでは最も親しみやすい花となっている。

飛鳥時代の白雉五年（六五四）、あるいはそれ以前に創建されたと伝えられる般若寺は昭和五十七年に本堂が再建されたが、それまでは荒れ寺として名を馳せていた寺院。秋にはコスモスの花群れで埋まる般若寺の春の主役は、ヤマブキの鮮やかな黄花である。

花の盛りは四月末～五月初め。





藤の花まゆげほどなり垂れそむる

軽部烏頭子

藤たれてわが誕生日むらさきに

山口青邨

フジ川春日大社(奈良市)

「下りが藤」を社紋とする春日大社ではことにフジが大切にされている。山内に樹齢数百年の古木が数多くあるが、なかでも見事なのが「砂ずりのフジ」。花房が長く砂をするほど長いというのが名の由来だ。花の盛りは四月末頃。

ツバキ川新薬師寺(奈良市)

寺名は「あらたな薬師寺」という意味で天平一九年(七四七)創建の古刹である。奈良朝時代の入母屋建築として国宝に指定されている本堂と真紅のツバキはまことにお似合いだ。

花の盛りは三月末〜四月初め。

日野碗の色に咲きけり赤椿

許六





白木蓮の散るべく風にさからへる

中村汀女

白木蓮ひらくよすべて天に向き

野瀬潤子

ハクモクレン 法輪寺(斑鳩町)

早春に咲く花のうちでひとときわ印象
深いのが純白の花を咲かせるコブシと
ハクモクレンである。山に咲くコブシ
がどこか寂しげで素朴な田舎娘といっ
た風情であるのに対し、園芸品種のハ
クモクレンはさすがに都会娘らしい洗
練された美で人目を引く。

法輪寺は推古天皇三十年(六二二)
に創建されたと伝える古刹。千数百年
の歴史を刻む古色蒼然たる堂宇と汚れ
を知らぬ純白の花との取り合わせは絶
妙である。花の盛りは三月末頃。



連翹の俯向く花の翳もなし
連翹や歳月我にうつつなし

原田種茅
角川源義

レンギョウ不遇寺(奈良市)
春本番に先がけて咲くレンギョウは
同じ黄花を咲かせるエニシダやヤマブ
キに比べてどこか寂しげである。しか
し、この寂しげな風情を持つがゆえに
寺院の庭にはびつたりの花といえる。
不遇寺は奈良に住む人たちは「レン
ギョウの寺」と呼び親しんでいる寺院
である。本堂のすぐ前側には数十本の
レンギョウが横一列に並べて植えられ
ているが、重々しい本堂としつとりと
した黄花との対照はまことに印象的。
花の盛りは三月末〜四月初め。